

療護施設職員リレーエッセイ

みんなに伝えたい

「Iさんが教えてくれたこと」

柳田 佳孝

福井県・光道園ライフトレーニングセンター 療護一課長



園に勤めて30年になろうとしています。園で最初に配属されたのは、盲ろう重複障害の方20名余りが生活するヘレンホーム（ヘレンケラーから取った名前）という棟でした。

そこでお2人の盲ろう者の方の担当になりました。その中のお1人、Iさんは50才の男性。たいへん温厚な性格の方で笑顔がとても優しく、職員からも人気のある方でした。

当時のIさんは日課として、紙箱を組み立てる作業を行っていました。そしてその中から引き抜く形で個別に対応する時間が週に2～3回。他に工作、体育、入浴などの時間がありました。

盲ろう重複障害のIさんとのコミュニケーションはスムーズではなく、ほとんど身振り、手振りでなんとか最低限の事を伝えていました。

そこで、個別に対応する時間は、主に彼とのコミュニケーション学習にあてることにしました。しかし点字学習を始めると、彼はすぐ居眠りを始めてしまうので進めることができず、私は困っていました。

ある日、彼の前に人形を置き、手を取って「あなたはこれ（人形）を描いて下さいね」と画用紙とクレヨンを渡しました。しかしその時彼が描いたものはいつもの絵ではなく、自分の名前を漢字で書いていたのです。どうも「あなた」と指さしたので、名前を書くのだなと思ったようでした。そしてカタカナでも名前を書いてくれたのです。これには大変驚いてしまいました。Iさんは文字を知っていたのです。それからコミュニケーション学習はカタカナを使うことに切り換えました。物の名前をカタカナで書く練習を始めたのです。カタカナを使った学習に切り換えてからは、彼は学習に積極的になりました。物の名前を何度もこちらの掌に書いてきます。そして忘れた時は掌と指を出して書いてくれと言ってきます。そのような繰り返しの中で、彼は少しずつ物の名前をカタカナで覚えてくれるようになりました。

た。そうなると思議なもので、彼と関わる毎日が楽しくなってきました。

その頃、ケース会議で彼の将来について話し合われました。そして10年度には彼は老人ホームに行けるように、今何をすべきか担当として考えてほしいと言われたのです。特に問題になったのは彼の独特の行動で、気がつくとその都度注意はしていたのですが、会議の後どうしたら止めてくれるか悩むようになり、彼にしつこく注意をするようになっていました。そしてある日、あまりに言うことを聞いてくれない彼に思わず手を上げてしまったのです。その瞬間あの穏やかな彼が「ウォー」と大声を上げたのです。

この二つの事が、私が今までこの仕事を続けてきた中で大きな出来事になっているように思います。一つは彼に思わず手を上げてしまったことですが、彼との人間関係がうまくいっているような思い上がり心があったのだと思います。後で「彼には50年かけて作ってきた彼の生活がある。それをある日突然、横に來た者にいきなり変えろと言われても変えられるはずがないな」と大変申し訳なく思いました。

もう一つは、重度の障害をもった人であってもこちらの思いを押しつけたのでは、関係はうまくいかない事を学びました。「何とかしなければ」という焦りがあった時、私たちは知らず知らずのうちに自分の考えを入居者に押しつけてしまいがちですが、大事なものは入居者の動作や言葉の中から学びとっていく気持ちなのだと思いました。そうすれば入居者は何かを教えてくれる、それを感じる心が大切だと思います。このことをIさんは私に教えてくれたんだと思っています。